

編集後記

学内で今一番もて囃されている流行語が「スリム」であることを、皆さんはご存じだろうか。先だつての教授会でも、偉いひとたちが説明に見えて延々とスリム論議を聞かされたが、おしまいはうんざりした。スリムとかダイエットとかシェイプ・アップとかエアロビクスとか、賑やかなことだ。そういうものは、妙齢のお嬢さんが口にしてこそ、仄かな色気も感じられるというものだが……。

研究館の入口と研究室を二重にロックする話があつて、どうしてそういうアホなことをするのかとびっくりして聞いたら、ガードマンからガードする必要があるのだそうだ。こういうのを疊韻法（オノマトペ）と言う。

巡視も研究館のロックも、我々の熱烈なスリム願望と密接な関係がある。拒食症で死んだ歌手のカーペンターは哀れだった。

スリム論議と紀要の肥大は、関係があるか、ないか。ともあれ、梅雨の雨足は激しい。梅雨時になると、条件反射のように、増水して溢れそうになった田舎の小川を思い出す。遠い記憶の底で、初恋の親戚のお姉さんに手を引かれた学齢前の自分が、その小川のとりを歩くのである。

(H)

昭和六十年七月十五日 印刷
昭和六十年七月二十日 発行

(非売品)

編者 愛知大学文学會

代表者 湯本和男

刈谷市幸町

印刷所 株式会社 刈谷高速印刷

株式会社

豊橋市町畑町

発行所 愛知大学文学會

振替 名古屋三十四五六四